



五元集
あまのりょう合
利

4419
3



4419

友少物也

是より別して務負を以て
 之れ心の心は英雄乃臣を以
 て馳走せらるる所神妙也
 叩境の祭あり第一
 成るる一として白綿つきの
 放ちるる東にお坂山南の
 立田西の水生山有乳
 乃鎮護をばり先一ツ
 の教書を認るる
 治雞坊乃何某筆を
 取て田饒の詞をかり蘇
 秦の謀を顯して神明



鳥

納受の志を乃る
開の清水を
水を一と頂禮
かりとせ

三十六合

春風心かられも引も家雞乃麻

二字と次

律節會不為ちをよの家の鴨後 辰下

是よりもの音乃新丰歌仙
乃左坐存のくと鳴るる空の天鶴

平麻をよつとよの軍配か
曲をつとよれり
右介平一ゆたの家の春
とつとよつと旅丁とありと
なる家鴨乃立片守
牝雞乃朝夕をまし押さ
留主居役付らるる度切て
附り其身の立居重く大
声をよめて勤番をわら
道戯平あひる傳兵衛と
ひり乃笑ひよめ

桃花雨をば竹の葉乃みくは足其角

二字トス

五六間述てい返に尾波の

し字と次

清明の節大雨志きりて思は

敗軍次稻麻竹葦に入乱

ゆれをの志さる尾波よりかたり

何あめの志さるらん落書

雞去昼竹葉とりふ句を書

捨るは是の山汎の僧雪乃

磯白干犬走生梅花とらる

對ちをさるるを時わらうて用ひる

とつと桃花雨ふるは羽翼

ハ醜くともさるる也晴て後

男良乃とつて返しをあらも

くし尾をらんを尾花浪

乃勢をそとゆひさるれ侍る

卅八合

白綿村乃黒て仕て取已日や

乙字

桃簾つる心ほとほり枚の埒百之

也

果大出乃男白綾のふんらり

片行てやんを出入るれを願角
カキやあまの酒陶氏とらんゆり
立髪枚乃葉にまきみちう胴骨
つんぐりとて卯斗樽のまぐれく
うらうらうら桃花の酔はんとせ乃
目の精を後力量いくららん

卅九合

く、呼吸胴迄をいる 鳥 甲

捕距由とん

後周平色並をなを次擲もか素琴

乙字とん

中入しとまけりるるハナ房乃

後見とん心得ぬ業也富士の煙
乃かりやるあらん力かひあく歯之み
きりるはと北離晨冷色と
アキはいもととを伝と伝象も
うくはわらう身焼必うるといへる詞を
あつとけし擲も心をうけては
し心乃り力乃出る寂中をうを
四十合

茶筌尾中野をたぐいそみうぬ習魚

左右乙字

前まを當にし 甲も 距 故 其角

茶筌髪にゆるる尾片しるや
 二千二番乃志る毛も手弱き
 方也あてかへし乃雜言すつのか
 崩口をるるをしとそ持とん
 四十一合

鼻の字を味方へ引や番 椒 雪花
 此とん

油の殿空餅はとる庭 莖
二字
 巖お乃水お舌鳴し三伏の番椒
 に鼻の汗次辛烈乃氣忽ち
 頂平へ急てあはゆる血のるる

男寒相撲急とる中あし
 味又いなりうてもるいあま
 空餅してつきたを次手もあり
 とれい不ひ乃心うけまはいより
 何けて本意とをわや
 八立七ッ起ハ関乃東の兵
 卯十二合

兵と動もしをわとに 呼ひ 何肛
二字
 足田鶴乃鞆丸乃負て務
 桃李不言乃詩兵と褒美の上

うらみ州本ををひけり一言誠ま
かひけり後トニとらひ出されて
棧鋪より此花をこゝへなかり

足田の傍の地味ハ伊勢の国

是乃裏の地味りきいあふゆるが 慈鎮
波ふよせても洗ひけりなり

成乃高下は松岡を置れり

海つづきのの片トともいへると

鞆丸のともいひつげ侍とや和

きとやうとつら丸の海をよるも

傍をよるしとの評義かゝらふ

伊家乃るんせ里乃あかゝらる

卯十三合

いとめき木乃芽をわく 距八 右此

胡葱二字の次もあふも取り 杭音古岡

是彼引用申るもあふねと

雞乃坊主のいふ若知あふ 岡指

先蹤正 かねの双あをを

垣ををりて 岡を合ふにたふ

なうらとあの人、あうまぬ成る

右の時節お應乃あふし州也

負手の味覚をりきるとりりも
りりきき巧言せ方この麩殿只
はるをそりり酔乃過きらと
言らぬるをりりりりりりり

磁味増

并四合

八乃字やさくの寄事と馨醒

左右しやま

浦利を母れひらぬれ蚯蚓の馬子

酔とらひささとりり好悪の

詞をりりりりりりりりりり

朱冠れりりりりりりりりりり
ひらりりりりりりりりりりりりり
めりりりりりりりりりりりりりり
一万箱玉母のりりりりりりりりりり
備えて母衣りりりりりりりりりり
りりりりりりりりりりりりりりり
本りりりりりりりりりりりりりり
卯十五合

血盲乃幾直の掃きぬ密掛竈棹孤
尾雲も緋桃の海てりりりりりり
百猿
二字りりり

雞籠の山明かんとてはる日鏡
 去る次周くとしてうらみ音を
 啼らうとみありし蜜柑の皮春の
 細作の室をあきから籠に入られ
 是をうつして三月と知る口惜かり
 血盲也若武者たたし目も
 かけ侍も毛をぬく冠をきそひを
 へ紅桃乃容りもぬいあをり
 冠重吳天雪白くをかう
 楚地乃花ももをぬく
 かといきて後いさあらん
 卯十六合

撫 務を凡羽乃平、難修寺

二字ありん

南京乃引音を猛平水や空毎閑

天王寺の務務後記ありあ
 所大坂矮雞の平、其手に
 ありし一りり今とも凡羽ありて
 鳴屋たり一白くも煤き
 是之源也の嫡く南京の小太布
 係入りていそれて尋常なり
 引音を海大勢とを合けらふ
 中あれは水天をりて千鳥

乃及うふれり関路のるも
声々トす申
卯十七合

足病乃かいは車や一 背 疲 花月
乙字

朱冠癰に潤三月待れり

烏医師の曰足やみ乃りし年
背折失盡てさむ方か
是當分乃弱をさし年ありあ
あつかうるさし冠癰希有に
一と六ヶ補病也常鼻と癰

鷹氣鬱は寒苦鳥亂る乃
多し良薬を得る此等
此病ありと漢家乃
至癰發の膏薬に
多しをさるる多し
志しとく命運を全
かすねて軍する
四十八合

波を蹴て巴を負一悟氣 喰 笹分
乙字
雞 籠 二人 静を合をとり
戴冠文と

此北負るを平にかりし七誘の中
 道もつて進みたりなりとあり塔気
 塔気とは名なり情ありと四層と
 阿ふも此ありと益きううをそ
 棟嫌うそと振興ありと粟津
 乃赤る所平放されて後いつら
 けとん其場もそも大あり
 三芳野乃奥所
 大葉島又放され美難あり
 元徒お知しとつとつとつ
 影を作らまことしとつとつ
 台なる中一野たるとつとつ

丁と二人静一

卯十九合

沼津より足高山や大樽立朝

屯とん

鳥山おへちやんやう乃雞わす

二二字

清光の関取乃血脉原吉を
 かきとて宿とあり利ノ
 共也みかともと

若き君も同くをき
 をちとて目出あり
 あり乃ありをひまなり

侍ら芳野唐土るもろくもろく
翅の薫物一紅粉化粧して
花美ふふ人此心をあはれ
迷をともては後法度あはれ
名ともみか放ちやりぬかの
帯瓜の巻ふ

身のうらをあげくあはれそめらね
とりのかきまてそ音もあはれ
うつきか乃奇也此心よか
とと

五十合

後口内推るも啄くも嘴て門

戴冠文トス

傳大士を雞鷲ふふしと聯合飲以

今ハ寺く乃雞を召忽推敲
三年の執りありて推ハ力啄
ハ品也韓退之是を相伴
て以鳥鳴春と世上ハ鳴りてを
らせしう輪藏乃三影
あきあきをかん訓てを魚の
きいこ場也しうとんつを
乃狂ひらうを笑へ

五十一合

拍手あかつ色をまをかハ具負 底下

左右屯と云

尾ヲシとも影隠し たり 故 雞 百之

社頭ノ雞カヤキ寄合此

をまのたんとあ拍手ハ松柏の

霜の後をまともも各浪入

角刀をねは笑あものぬ

神山乃拍乃平手うらうらき

笑ナニ番も

五十二合

唯物血臭の嘴を比ハも州 雪花

五字

願 畢凡赤き酒乃いとも 雪花

捕距武

比も州もも是言しから業を

得を舞やるとい龍と云の傘

りさうらうらきまもをぬぬ

目ら味冠ともは乃らうら

あう願ぬらう今ハあう

此鬼酒を力と云共かれハ佛力

とらハ神力をまへうとも

あふるさうら

五十三合

血玉又浮ぬ沈む魚はらりひ 勝

左右乙字

筋浦乃破軍まづる花の軍志北

血玉あなまきしる浮舟沈んで猶

ひ後状跡くろてんくろり筋浦

は比浦小星ひり跡まやりの

手合乃くろやう左切ある屋

花と女梅花乃陣をうす

とて

五十四合

引色も日比の煤乃埒鴉乞

五字

相暹羅乃勢を隠し花曇り 習臭

あゝ七巻を秋の夜乃月

引色とかまの松詞 正廣

日頃の裡もとらひひみ引合を

向よりほくろと雞人曉か唱ふ

新声明王の眸を鴉馬より

あゝあお暹羅乃花軍

一巻千を千合をくろは心も

くろもろ

五十五合

雞頭乃追手分梁の紅糸分 芥分

此

土餅分 豆腐分 豆分 君上分 歌分 鳥子

二對乃各目分 立分 立分 立分 立分

はあちつ分 女所分 女所分 是分

雞分 同分 紅糸負分

とほ分 女品分 女品分 女品分

紅葉鳥鹿分 紅葉鳥鹿分 紅葉鳥鹿分

新糸の因者分 場分 食分 食分

乃分 乃分 乃分 乃分 乃分

角力乃外分 他分 他分 他分 土

餅分 餅分 餅分 餅分 餅分

葛薙の白分 葛薙の白分 葛薙の白分

五十六合

時下に後悔分 あり分 馳分 合分 合分 百分 様

乙字 右乙字

堀也乃眼を分 孺分 の鉄輪分 取

て分 睡分 睡分 睡分 睡分 睡分

了分 度分 度分 度分 度分 度分

時下分 時下分 時下分 時下分 時下分

乃分 乃分 乃分 乃分 乃分

空の傍負後毎すなり
 三足のわらわし輪を世の中のみり
 木のこゝろでちあをまや
 力をこゝろみぬ中古野出の衣三布
 と云々の片腕を切らる骨を
 皮引かるをこゝろありしを
 鋸をこゝろの福を引切て捨
 ころ素門と云々の片枝と早
 此意地やわか
 五十七合

欠似牛 亦乃根撰や若半合其角

砂水おと去り息を古湘江コウカウ

捕距武
 足を木の根ありと候所方のいし
 了け負後たてしも道理古湘江
 昔は正乃唐織をこゝろつち
 邪慢を候を手おつち三番打
 ころこゝろ足れみころい
 難也

五十八合

雌々毛虫と捌く羽癖は素
 屯

吳

いさかひり別まや唱よ昼下り 雪花

潜確類書と雜の蜈蚣を以
酒とに喰ひ桑椹酒と
其毒醉真乃物癖をつく
後ひわたりを
くり左へ廻るや
あふもとか
右は樂をがも知ると
早天わらう乃物待
しるし角力揃り
あふ別まよ

五十九合

風負乃つやう大なるや一個、其角

後軍あふ独りぬねや雄乃役

甲の志を移毛をつみよる鏡
首隠はる海鬼也こころいに
をゆきよの森乃海を平おさ
野み伏山平即る白ちの原を
に忍てかつの爪をかこもるおと
宛竟の左忽に
舞のあそびを

飄鷺くくく風情

苦く

六十句

絢突乃時をも同をんを独樂

戴冠文と次右五字トス

ちやち王の小結の進ふまは 鷺 白橋

韋敵天乃名くあをくしと

引廻しともあの下界へり提子

とくは去る胸を突て絶

入る溜おひ廻る大独樂乃

くしく乃泡とまをくくく

花の惣一

あひ片もの辨難合さうぬ

て去るて肝をさやうく

六十一句

鬚の廐から出て鳥のさ

五字

噫にも知るさうさ鳥伯樂亦毎雨

七乃の命道はりさうりあまうく

直、里つさ毛臍関内もを乃

佛意をわああり候し

くはけ乃もさあ口世界

国去中一教い 多ふか
欠伸噫噫心をもつ多て相
をもつ多て伯樂乃煉磨也
さぬく乃手入今日のるを襟
裾をかきり立るる不當坐は夫
夫あまもも其化あるをねく
鵬乃解し
六十二句

投打乃履を相手やせつ六閑
乙亥とて

今日の関籠を狂ふか六崎花月
五字とて

伊勢町小田原甲雞火とも乃
中河く木戸を限つて取合ふ
童僕的心も亦志ありてめく
獨遊をすれば惣くめあふ
了者とも羊比日頃乃意趣を
合て其越乃名主を煩らば
然るり是くは糸花長安乃
江戸気可て飽占たつる肥る
ゆく也
或人乃いづる信濃のる大吾也
其卯も九年母なりとありといふ
ては越後乃園符を荷ひて

川中島乃半合をんとや
龍而乃成漢楚の争ひ是
を末世の咄とすなり
六十三合

聾タラ白をよとひふ矢壺くく女辰下
乙字

抱分て凡乃洗足を離れ酒百之

たるとい前合也をのりりく
羽に札をつきて放をりり
阿らちるのりりもあいに
多拂りりりりりりりりりり

乱をすれは抱分とるも
去らふ凡のりりとを酒
ひりりに成しはつりりり
歪者あうりりりりりり
油りり大敵
六十四合

埒をりりりりりりりりりり
乙字

碁盤もいりりりりりりりり

埒をりりりりりりりりりり
他の悪黨をりりりりりりりり

八声の觸頭なるなり一有
 孟嘗君の千の鳥なりとあり
 一に其千の鳥とあり
 千をづくは雑術 三千の
 容を越えたりとあり 散沈
 人形乃名を以て飛彈乃
 撮と受領を以てなり
 昔のさうりての聲を以て今乃
 しくみハ形を工とあり 殺漢
 乃過例 を以てし 受領の
 史記のものをぬるなり
 鶴ひし是ハ鷄也

羽多ハ羽形なり

難波ハ名ニ羽也 番ハ

六十五合

尾狂ハ羽とあり 逆毛ハ

左右ニ字

踏廻ハ浅黄とあり 月士軍 雪花

尾狂ハ羽とあり

雞乃御子ハ逆毛也

此句ハ羽の事也 未練
 亦も中ハ尾狂ハ羽也
 乃そハ逆毛也

くくくは首尾十分なるをき
も十五年以前乃若氣りて
しきくは取かつしうどし
くくくくあうくくあうくく
口くくくも牛後と取うく
あうくくく詞くくく
鳥主も弗損浅中のみ廻
表裏あく仕立榮くく心の
濃くくくはあうくくく
六十六合

撮距小荷試奉行小隠きくく習奥
しきくく

くくくをくくくくく

軍旗乃くく聞つ下くく下
書片くくく中くく小荷 駄
からくくの年候乃くくの比陣くく
くくくくくくくくくくく
矯矯くく

くくく落を乃くく

坂落乃くく曹司乃くく主
得くくくくくは換くく
かくくくくくくくくく
経くくくくくくくく

三千騎を先かけて落籠
拂ふをさるる落籠れしをも理りと
夜軍ハハカクをさるるを分目
の同平しとあてし

秘傳乃ちあつとら

六十七合

カ尾の旗をひらくも徳々々百之

二字

おぼろの番てささく由後が

猪鬃引音を合を味方乃ち朱冠
をささくささくささくささく

辰の舞羽をひらくも起る
おとさ濁をれをも徳の一途
カ尾の白旗をひらくも
おとさささくささくささく
関乃ち神乃ち郷前
謹上再拜一奉
六十八合

陸奥殿乃ち鎧をひらくも合

五字

おとさささくささくささく
や 叔土 儀 甚 目

二字

白足乃ち先陣後陣

あつていふとむらさきのあつて負
たつていふと初年とあつていふと
と社はあつていふと白土家
あつていふと亦あつていふと
て御陣屋もあつていふと相撲
あつていふと踊りあつていふと
あつていふと一条目の剣札
あつていふと叔表あつていふと
あつていふとあつていふと
ともあつていふと評あつていふと
六十九合

百士乃新毛ふしの毛けの毛けの毛け

戴冠文

火啄ひやはああに臆病毛おそ 毎兩

二字

落足お千負ち志しはくはくく馬まの
蹄ひまついてちりちりあつていふと
さぬさ鮎あ乃の尾おをを火ひ乃の毛け
のの毛け乃の毛け乃の毛け乃の毛け乃の毛け
法は律り乃の毛け乃の毛け乃の毛け乃の毛け
あつていふとあつていふとあつていふと
啼なてあつていふと満所まんあつていふと
篝火かき消けあつていふとあつていふと

乃の身しおる焼焚の雉出奉り
 おのゝこころくはあつしういひ
 て寒食なり家を乞つり
 身乃上いりもさきをれり
 異国より火のすむも何の
 今此生鳥ともいふ屍を山吹
 とらへて根を根肉を大根
 ありしと銀杏を刻おし
 前世乃昔業因こそつ
 人乃さき世をせめて決のね
 ちるしういひの鳥とも
 去りしころ

七十合

一番乃勝を佐久間う吹流し其角

五字
 一 貝のかく次雑あり十二揃

諫鼓苔深ク治雞坊
 塵靜也とりあつり氏
 湯神の力あはれ倍
 乃冬あまつらるる
 例年下らるるあつり
 戸関を忘れり
 一 貝十二隠 貝十二

務負を決す後十二のかり
勢あり此更委細なり
然の夜乃千直をて新なり
とももあふありてちかふか
ちんてり司を自致極中
ゆえんぬ箱弓の袋に水
引をとりて鳥の跡を寶
と一正木のかりて永
とらるる集の巻なり一時乃
鼓をうらむるを奉新

鳥沙汰日

美母三年五月二十東山乃
仙洞より雞台乃戸ありなり
公卿待從僧徒亦乃北面の輩
常平祇候乃老も左右を
つらかこれ銀也賢亦なりて
あふ枝なり 月ひ八尺乃銀墓
ち居る藤乃花を結ひけ
る橋樹薔薇牡丹山吹乃
作る花をふりあて伶人
衆集 春閑なる御堂
の山乃青山乃とさるる

箏箏を吹和琴を去々る
嗟歎乃舞樂を好む
故両方乃雞を合ふ

一番

左 右衛門督乃鳥字無名氏

右 五條大納言の鳥字千代丸

以上十二番左傍
卯番七勝七番
と記す奇々舞妓與遊下
絶了此の盃を勤む祀る
放宴とらといつとも万代乃

羨談を傳ふ黄昏了
あつては乃々是此事
中御門乃左大臣殿乃侍
つと奉り人経房
朝臣書 奉つたる也其作
乃記可るひ合を傳るわ
何れは是なる也

三 ちのたは乃々此の事なり

花乃の 後辰を

唐子 合すなる

左右總計

麗人

二句

五字

十句

三字散

十八句

二字

卅六句

雁形乙

五十二羽

屯

十六距

寶晉齋真簡

左列物兒

